

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要

五位組団体参拝に参加して



「世のなか 安穩なれ」 ・ 御影堂 御真影様
龍谷山 本願寺 (2011年4月11日9時11分撮影)

2011年
(平成23年)
9月1日

五位組だより

念仏のこころに生きる生活を

浄土真宗本願寺派
高岡教区 五位組

題字・織田隆夫

「五位組 組報」 第三号 発行ご挨拶

高岡教区五位組 組長 織田隆夫

五位組組報の発行も、はや三号となりました。振り返ってみますと昨年からの一年の間、宗門や社会情勢には本当に多くの変化がありました。宗門では「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」の厳修「宗門法規の改正」、社会では「東日本大震災」「放射能汚染」等々、今後の私達を取巻く世界が大きく変わろうとしている予感さえいたします。

五位組では、四月中旬に三百人以上の門信徒と共に第一回団体参拝を行ってまいりました。震災の一ヶ月後でありましたので、とても意味深い参拝でもあり、今一度親鸞聖人の願いに立ち返る旅であったと思います。

親鸞聖人は、歎異抄第四条で「聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐるごとく、きわめてありがたし 今生に、いかに、いとおし、不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」と言われました。

「聖道」というのは自力で修業して悟りを開く立場ですが、そこで起こされる慈悲、人びとを憐れと思ひ、悲しみ、いつくしむ心は、結局は人間の方で人間を救おうとすることです。から、思うように助け遂げることができないのだ。人びとを憐れと思ひ助けようとする心、それは「始終なし」つまり目的を遂げることができないと重ねておっしゃってられます。

しかし、だから「自力の慈悲」ではダメだとおっしゃっているのではありません。「始終なし」と身を切られる思いで悲しんでおられるのです。歎異抄第四章は続けて「浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり」と言われます。

自力で人々を救い取ろうとする聖道の慈悲に対して、浄土の慈悲があると言われます。それは、念仏して急いで仏に成って、仏様の慈悲によって、人々を思うように助けることだ、といわ

れるのです。「しかれば、念仏も
うすのみぞ、すえとおりにたる大
慈悲心にてそうろうべき」と、
「念仏申すのみ」が本当に人々
を救う道だと結論されます。

震災の人びとを憐れに思い、
助けようと思うなら、ただ念仏
申す、そのみ、とおっしゃる
のです。

親鸞聖人の究極の願いは、人
びとと共にあつて、私も救われ、
人々も救われるというところに
ありました。そのために、急い
で仏にならなければならなかつ
たのです。急ぎ仏になるのは、
人々を救うためであり、皆一緒
に念仏するためでした。これが
本当に人びとを救い取る道なの
だと言われるのです。私ひとり
が救われればいい、という念仏
ではありません。

ただ念仏申すとは、仏様に「助
けたまえ」と頼む、ことではあ
りません。阿弥陀如来という仏
さまは、飢餓や地震や津波から
守ってくれる仏様ではありません
ん。念仏申すとは、私の救いが
定められ、正定聚不退の位には

いり、さらには亡くなつていか
れた方々が救い取られたことへ
の報謝の念仏なのです。

如来のご本願が、わたくしに
至りとどいたそのとき、私の救
いが定められ、いただいた如来
の大悲によつて苦難の人びとに
向かわなければならぬので
す。親鸞聖人が、蓮如上人が、

なによりも念仏申せと、勧めら
れるのは、念仏申し、人びとを
救い取れる身となれ、というこ
となのです。信心において、念
仏申し支援活動を怠るなどのお
示しです。

「願作仏の心は これ 度衆
生のこころなり」（高僧和讃）

「願作仏の心」とは、仏になろ
うと思う心です。「度衆生のこ
ろ」とは、人びとを助けたいと
願う心です。私が仏になろうと
願うこと、それは人びとを助け
たいと思う心と一体となり、苦
難に立ち向かう原動力になりえ
るのです。

五位組では、今後高岡教区と
協力しながら支援活動を継続い
たします。また、十一月中旬に

は、第二回団体参拝の計画を致
しております。残された人生を
どのように生きるかを、親鸞聖
人のお心に尋ねる旅になれば
と願っております。

合掌

支援参加者名簿

第一次、四月

織田隆夫、藤田宝祐、福田慶隆、
杉森修和、笹島久昭

第二次、六月

織田隆夫、藤田宝祐、豊原正靖、
福澤庸二、上野大観、福田慶隆、
山田圭悟
(敬称略)

五位組「東日本大震災」 救援ボランティア派遣に参加して

これまで第一次・第二次の二
回にわたつて五位組支援活動に
参加させていただきました。

活動内容は瓦礫の撤去作業に
炊き出し活動などでした。
津波が襲った被災地はテレビ
等の報道通り、何処も彼処も瓦
礫ばかりの惨状。どこまで行つ
ても続く一面瓦礫の光景は、津
波の怖さ、残酷さ、そして無慈
悲さを強烈に私達に印象づけま
した。

その膨大な瓦礫の撤去作業に
私達もわずかながら従事させて
いただきました。三十人ほどで

五位組 廣濟寺 福田慶隆

行つた七ヶ浜での側溝の流入物
除去作業では、大人数にも関わ
らず半日で進んだ距離はわずか
に百メートル弱。膨大な瓦礫や
土砂は、土囊に詰めても詰めて
も一向に無くなる気配がありま
せんでした。被災地には他にも
側溝などは無数にあります。そ
れを考えると正直気が遠くなり
弱気な思いにもなりました。し
かしそんな時にも、懸命に作業
に励むボランティア仲間達の真
剣な姿が自分に前を向く力を与
えてくれたように思います。
ボランティアに来ている方々

は、老若男女、実に様々です。日本全国から集まっており、中には外国人の方も多くおられます。確かにお互いに知らない者同士の集まりです。けれども復興に向けての思いは皆一つ。お互いに声を掛け合いながら、励まし合いながら一つのことに立ち向かうことが、どれだけ力を分け与えてくれるものなのか、そして苦しさを乗り越え前を向く力になるものなのかということを実感させられました。

被災した方々は、家を無くした方、家族を亡くした方、またその両方の方、様々な苦しみを抱えて今も生活なさっておられます。炊き出しの際、被災したおばあちゃんに声をかけま



した。「大変でしょうけど元気を出して下さいね」。するとおばあちゃんは笑ってこう答えられました。「私よりも大変な思いをしている方がたくさんおる。それを考えたら私が悲しんでなんかはおれん。とにかく前を向いて元気にやっついていくよ」。そのおばあちゃんも家と家族をなくされた方でした。きっと胸の内は悲しさで辛さでいっぱいだったと思います。その悲しみに耐えて辛さに耐えて皆に笑顔を振りまいてくれるおばあちゃんその姿に、やるせなさや自分の無力さを感じずにはおれませんでした。

震災以来、「悲しみに寄り添う」という言葉がよく使われています。「悲しみに寄り添う」と口に出すのは簡単ですが、「寄り添う」

ということとは実は大変難しいことなのではないでしょうか。

どうすれば本当に「寄り添う」ことができるのでしょうか。自分がどれだけ「寄り添って」いるつもりでいても、相手にとってはありがた迷惑のこともあるでしょうし、また逆に相手を深く傷つけてしまうことだってあります。ならば被災した方の悲しみに本当に「寄り添う」とはどういうことなのでしょう。結局のところ答えというものは存在しないのかもしれませんが、けれども、今私達にできることというのは、ただただ悲しみに寄り添う「努力」をしていくことだけなのです。もちろん自分達にできること



には限度があります。時間・お金すべて限りのあるものです。また人それぞれにできることも違います。けれども、それぞれの立場で被災者の悲しみに寄り添う「努力」をしていくことが一番大切なのだと思います。私達一人一人が復興に向けて一丸となつて力を合わせ、お互いに声を掛け合い被災地を応援していくことが、被災者の方々にも勇気を与え、そして悲しみの中でも前を向く力となってくれるのではないのでしょうか。

これからも全国からの支援活動は続いていきます。その中でわずかでも被災者の方の力になれるよう今後とも自分の立場でできることを少しづつさせていたきたいと思えます。

五位組主催研修会に参加して

三月十一日に起こった東日本大震災を受けて、五位組では大震災に関連した研修会が開催されました。

先ずは、六月二十二日に石堤の長光寺にてビハラー研修会が開催されました。講師は昨年引き続き臨床心理士の坂本美奈子先生をお招きし、『震災が私たちの心に残したものは』をテーマに、最初は坂本先生のお話を、後半はボランティア活動報告の後、坂本先生と織田隆夫五位組々長との対談形式でそれぞれの思いを語っていただきました。

その中で、特に印象に残ったのが「(何かをお願いする)子供に『被災地の人は震災で辛い思いをして我慢をしているから、あなたも我慢しなさい(被災者に比べたら、そのお願いは我が儘だ)』と諭すのは止めてほしい」という坂本先生の話でした。それを言ってしまうと、

子供達の被災者に対する印象が悪くなり、被災者の苦しみを共感しようという心が削がれてしまうというのです。この話は大変心に響き、そして色々問われました。私達は、比較の論理でもって「あんな所に住んでいなくて良かった。(震災の少ない)富山に住んでいて良かった」と、自らの幸せを確認したり、他人に我慢を押し付けたりします。しかし、その「比較の論理」には「不幸せな人達がいる。苦しい・悲しい思いをしている人達がいる」という前提があります。そして、そこには他の苦しみ悲しみを「他人事」として見る私自身がいるのではないのでしょうか。

七月二十四日は、同じく長光寺にて『震災と放射能を考える夕べ』をテーマとした研修会が開催されました。始めに五位組のボランティア活動報告があり、その後福島県及び千葉県よ

り富山県へ避難されている方々より放射能汚染に関連した現地状況の話を語っていただきました。



福島県及び千葉県より
避難されているみなさん

この研修会では、被災地の方々から現場の声を聞いた思いが致しました。私達の予想以上に現地の放射能汚染の状況は厳しく、安心して子供たちと住めない。しかし、行政や学校は安全・安心と言い、それに対して異を唱えにくい。それ故に、他県へ避難するとは言いにくく、中には周りに嘘をついて富山に来たという方もいらっしゃるま

五位組 珉照寺 山岸智史

した。それを聞いて、私は国家(行政)や大企業、あるいはマスコミが流す情報を何の疑問もなく鵜呑みにしていると思えました。そして、現在は「大丈夫です」というイメージが作られた社会状況だと痛感いたしました。そのイメージを作っているのは、国家や大企業、マスコミはもちろんですが、私たち一人ひとりもまた少なからず加担しているのです。そして、その作られたイメージは被災者の方々に苦しめているのです。

二つの研修会を通して、私達は自らの立つ位置が問われているのではないのでしょうか。つまり、被災者側の立場に立っているのか、それとも、権力者側(国家・大企業・マスコミ等)の立場に立っているのか。被災者側の立場ではなく権力者側の立場に立つということは、被災者の苦しみを「他人事」とし、比較の論理でもって自分

の幸せを確認しようとし、また、被災者の苦しみ悲しみの声を聞こうともせず、権力者が流す情報を鵜呑みにすることではないのでしょうか。

今もそうですが、日本が危機的な状況になった時、「一つになろう、日本」といった言葉が飛び交います。確かにみんなの思いを一つにすることは大切かもしれないし、しかし、どの立場に立って「一つになる」のか、私達は気をつけなければなりません。権力者の側に立って「一つになる」、つまり、彼らの発する思いや情報の下に「一つになる」という事は、間違った方向に行く事が多く大変危険です。そうではなくて、被災者の声や思いに「一つになる」。それは、私達一人ひとりが被災者の苦しみ悲しみに主体的に向き合い、その声を無視しないで聞いているのではないのでしょうか。今回の二つの研修ではそのことを学んだような気がしました。

報 恩 講 ご 案 内

【日程順に記載してあります。】

各寺院の報恩講の日程をお知らせします。どうぞお誘い合わせのうえお参りください。

石堤 法善寺

九月二十四日 朝 九時三十分 昼二時
九月二十五日 朝 九時三十分 昼二時
法話 高岡市伏木 安居 建 師
※二十五日は祠堂経法要

赤丸 性宗寺

十月十一日 昼二時 夜七時三十分
十月十二日 朝 九時三十分 昼二時
法話 射水市市井 公文名 眞 師

四日市 浄明寺

十月十四日 昼二時 夜七時
十月十五日 朝 九時三十分 昼二時
法話 射水市市井 公文名 眞 師

辻 西福寺

十月十六日 昼二時
十月十七日 朝 九時三十分 昼二時
法話 高岡市伏木 山名 一徳 師
※十六日は住職継職法要

立野 永念寺

十月二十日 昼二時
十月二十一日 朝 九時三十分 昼二時
法話 福岡町土屋 山岸 智史 師

三日市 光源寺

十月二十二日 昼二時 夜七時三十分
十月二十三日 朝 九時三十分 昼二時
法話 高岡市佐加野 磯原 孝雄 師

本保 本正寺

十月二十六日 朝 九時三十分 昼二時
法話 高岡市内島 岡西 法英 師

佐加野 光明寺

十月二十七日 昼二時 夜七時
十月二十八日 朝 九時三十分
法話 高岡市内島 岡西 法英 師

内島 教願寺

十月三十日 昼二時 夜七時
十月三十一日 朝 九時三十分 昼二時
法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

石堤 長光寺

十一月一日 昼二時
十一月二日 朝 九時三十分 昼二時
夜七時
十一月三日 朝 九時三十分 昼二時
法話 氷見市布施 圓山 清 師

中保 善教寺
十一月三日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 氷見市中田 清水朗 師

笹川 廣濟寺
十一月五日 朝 九時三十分 昼 二時
夜 七時
十一月六日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 高岡市伏木 山名一徳 師

麻生谷 西光寺
十一月七日 朝 九時三十分 昼 二時
夜 七時
十一月八日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 石川県輪島市 廣陵兼純 師

上向田 浄永寺
十一月十一日 昼 二時
十一月十二日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 氷見市脇 寺西良夫 師

山岸 珉照寺
十一月十六日 昼 二時 夜 七時三十分
十一月十七日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 氷見市余川 宮木美弥子 師

舞谷 永賢寺
十一月二十三日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 小矢部市興法寺 立川証 師

五位組 東日本大震災救援活動支援金報告 (第二回)

ご支援をいただいた方々

(第2回目)

光源寺
公文名 眞
伊東 藤一
笹島 久昭
水波組 西養寺
高木 隆夫
城山 昭市
珉照寺門信徒一同
本保地区門信徒
南 すめ
谷崎 年子

(順不同 敬称略)
(8月30日現在)

支援金総額	974,849円
第一回、第二回支援活動他支出	322,804円
8月30日現在支援金残高	652,045円

五位組東日本大震災救援活動支援金に多くのご協力をいただきました。ありがとうございました。

東日本大震災救援活動「支援金」の御依頼

- 募金内容 五位組 東日本大震災支援活動「支援金」
- 金額 一口 1,000円 ※特に決まりはありませんが、一つの目安として
- 納付先 五位組各寺院に直接お納めください。
- 事務局 五位組 組長事務所 (高岡市石堤3661 長光寺 TEL0766-31-1128)
※御不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

編集後記

第3号の発行は本山での『親鸞聖人七百五十回大遠忌法要』の参拝、東日本大震災の支援活動の報告、そして今後の更なる支援に五位組として皆さんと考えるべく、ご協力のおかげの御報告、記事となりました。五位組としても組長の熱意と共に当面支援を行なっていく事が大事では無いかと思えます。又、各お寺での報恩講の時期となりました。時間の許す限り聴聞に心掛けたと思います。

合掌